

## コンピュータ・ネットワークを活用した知的障害児の学習と支援 ～チャレンジキッズへの関わりから見た生徒の変容～

島田勝浩・田川由美

研究協力者：チャレンジキッズ研究会

### 1. 研究の概要

情報グループでは、これまで2年間、チャレンジキッズやインターネット、情報機器を活用した学習と支援について考察してきた。

本研究ではチャレンジキッズの利用に関して、中学部のグループ学習（国語・数学等を中心とする教科学習）で取り組んだ内容について、その過程と生徒に見られた変容に関して考察していきたい。

今回、研究の対象としたのは、中学部の生徒6名で構成されるグループである。知的には中度以上の生徒たちで、簡単な読み書きや日常会話などは十分にできる。しかし、学習に対して「難しくてできない」と思い込みなかなか取り組めない生徒や、自信のなさなどから学習およびコミュニケーション面に不安を感じる生徒など、実態は様々である。この生徒たちに学習に対する意欲やコミュニケーション面での成長を期待したい。そのためには、学習の場の拡がりや、そこで生まれる相互作用での学びが重要であると考え、そのかわりをチャレンジキッズに求めることとした。

### 2. 今年度の実践経過

チャレンジキッズでは、昨年度から「ゴーヤー栽培コンテスト」を実施している。この企画はチャレンジキッズが毎年行っている定例の研究会を沖縄で開催したことを契機に、その時の参加教員を中心に企画された、いわば参加校が同時進行で取り組む「単位」として始まったものである。本校では昨年度も中学部のグループ学習において（今年対象としている生徒も一部含まれる）このコンテストに参加したが、ゴーヤーの栽培には取り組めたものの、生徒たちが自らチャレンジキッズに発言するという活動までは取り組むことができなかった。

そこで、今年度は、まず「コンテストがあるよ」ということを生徒たちに紹介し、その場で「参加してみる？」と意見を聞くことにした。その結果「やってみよう」という意見にまとまり、その場で代表の生徒に参加表明をしてもらうことにした。

その後、種が沖縄から届いたことや、その種を植えたこと、無事に発芽して畑に植え替えた

ことなど、栽培の経過をチャレンジキッズに報告していった。その過程で、他の参加校から返ってきた返信についても、それを読んでさらに返信を出すなどした。

2学期に入り、ゴーヤーを収穫した。本来8月頃が収穫のピークで、実際夏季休業中からすでに実がなり始めていたが、通常よりやや種植えが遅かったためか、9月になっても



ゴーヤーの種を植えたよ

収穫できた。

収穫したゴーヤーは、数学の授業として、長さや重さ、周囲の太さを測定し、その結果を国語の授業としてチャレンジキッズに報告した。

また、あわせてインターネットでゴーヤーの調理法について検索した。ホームページの閲覧や検索エンジンの利用は日頃から使い慣れている生徒が多く、30種類近くのレシピを検索した。その中から話し合っ、各自が最も作ってみたい料理を1つずつ選んだ。

### 3. 学習内容の教科への位置づけ

ゴーヤー栽培コンテストの取り組みでは、ゴーヤーの栽培はもちろん、ゴーヤーの長さや重さの測定、経過や測定結果の報告や、さらには参加校ごとの発芽や栽培経過の時期のずれによる地域差の実感など、扱う内容は多岐にわたる。これらの内容はそれぞれ適切な教科に位置づけて学習に取り組んだ。それにより、「ゴーヤーに関する一連の活動」であるという必然性のもと、各教科の内容をより体験的・操作的に学習できると考えた。またこのことは、前述した学習に対してマイナスイメージを抱く生徒にとって、教科の学習としての意識を強くもつことなく、無理なく学習に取り組めるようにとの配慮にもつながった。

実際には、右の表のように学習内容に応じて適切な教科を位置づけて学習を展開した。これは、本校中学部が「グループ学習」「職業・家庭」「美術」をすべて同じメンバーで行うスタイルであるため、よりスムーズに展開できた。

教科	学習内容
国語	チャレンジキッズへの報告(文章表現)
数学	ゴーヤーの計量(長さ・重さ)
社会	産地沖縄や参加校について(地域差の理解)
理科	種や花、茎、根の役割
職業・家庭	栽培活動 ゴーヤーを使った調理

### 4. 生徒の様子や変容

1学期に取り組み始めた時点では、直接会ったことのない人に対して手紙（この場合はチャレンジキッズという電子掲示板への書き込み）を書く経験がなかなかないだけに、相手に発信したという実感は薄いものであるように感じた。しかし、何度かやりとりをしたり、友だちの取り組んでいる様子を見たりする中で、大きな変化を見せた生徒もいた。まずはその例を挙げてみることにする。

#### (1) A男の場合

初めて書き込みをする時、「どうやって書けばいいの?」と不安そうな様子で報告をしていたA男。彼は照れ隠しのように「～ちゃんでした」と、自分の名前に「ちゃん」をつけて種を植えたことを報告した。それに対して滋賀県のI先生は「A男ちゃん、こんにちは」と、彼の表現を受けた文章で返事をしてくれた。

自分の書いたメッセージに対して、会ったことのない人から、それも自分のことを受け入れてくれた返事が返ってくる。そのことが、彼に「うれしさ」となって届き、また返事を書いてみようという気持ちにつながったようである。

そうやってI先生と1～2回やりとりをしていると、そこに東京都の養護学校に通うMさんからメッセージが届いた。

初めての緊張感から、照れ隠しを受け止めてもらいI先生とのやりとりに楽しさを感じていたA男。そこへ突然届いた、彼にとって初めての「他の学校の生徒から」の書き込みにより、またこれまでと違った緊張感が感じられた。実際「どう書いたらいいかな」と真剣な

顔で考え、丁寧に作った文章になっていた。

そんな中、6月の修学旅行で1つ目に訪れた目的地は滋賀県にあった。バスの車中で隣の席に座っていたA男に「ここはI先生のいる滋賀県だよ」という言葉かけを試みた。そのときに返ってきた言葉は「そうなんや」という感じだったが、その後の彼の表情は、それまでとは少し違っていった。それはI先生がいる県まで来たという実感をしているようだった。

いろいろな人から返ってくる反応。相手が実際にいることの実感。これらを経て、彼の中で「また報告してみよう、でもいろんな人が見てるから、よく考えて書かないとね」という気持ちが起きたようである。

## (2) B子の場合

B子は、日常場面ではよく友だちや教師に話しかけてくれる生徒である。しかし、あらたまった場面や、自分の考えをまとめて発言しなくてはならないような状況になると、気恥ずかしさや自信のなさなどにより、なかなか話そうとしない（できない）生徒である。

そんな彼女にとって、見ず知らずの、会ったこともない人にメッセージを送るというのは、相当大変なことだろうというのは容易に想像できる。そこで、彼女に対してはチャレンジキッズへ報告することは強く求めず、様子を見て「やってみる？」と時々誘いかけるように接してきた。

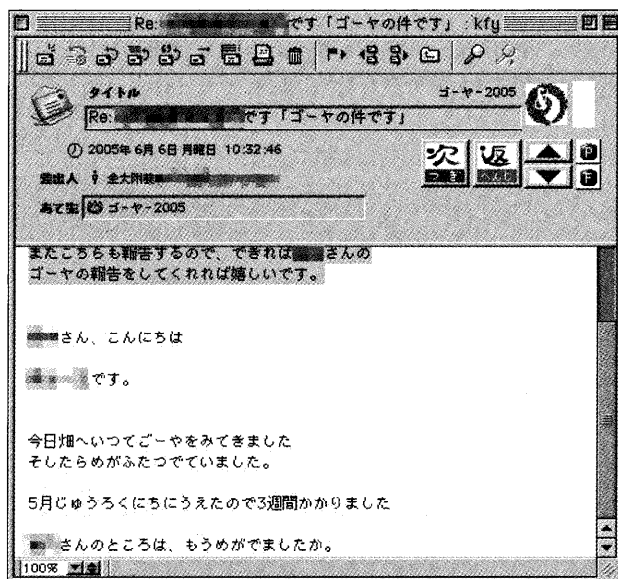
学習が進み、何回か友だちがチャレンジキッズへの報告や返事をしている様子を見ていたB子。記録の報告をした9月の時点でも、やはり彼女から「書いてみる」という意思表示はなかった。しかし、誘いかけに対しては、少しずつだが「やってみようか」と感じられる表情がうかがえるようになってきた。

そのうち、ゴーヤコンテストの結果が発表された。本校のグループは、参加校の中で最も重いゴーヤだったということで「まぎさんゴーヤ賞」を受賞した。その結果を全員で確認した後、各自で受賞のお礼の文章を考えた。

まず紙に筆記して文章を考え、できたものをコンピュータで入力するという段階を用意して取り組んだ。初めは静かに友だちの様子を見ていたB子にも紙を渡してみた。すると「難しい」と言い困った表情になった。そのまましばらく様子を見てみると「マツケングループのことでもいい？」と聞いてきた。「いいよ」と教師が答えると、またしばらく考えて「(やっぱり) 難しい、何て書くか分からん」と言った。そこで「今まで(ゴーヤに関して取り組んだ) のことでもいいよ」とアドバイスをすると、「種がいっぱいでびっくりしました」と紙に書き始めた。

一通り書き終わり「(先生が代わりに) これ(一緒に書いた文章を) 打ってもいい？」と問いかけると、少し考えたような様子ではあったものの「うん」とうなずいた。こうして、教師の代理入力ではあるものの、今回の学習の中で初めてのB子の発信が実現した。

代理入力しながら「学校名と名前を書かないとね」と言い、文章のはじめにそれを付け加えて、彼女の文章を入力していった。すべて打ち終わり、さらに受賞の感想を入れるこ



初めての「友だち」への返信

とを勧めてみたが、「でも恥ずかしい」と言うのでそれ以上無理に勧めることはしなかった。そこで「これでいい？」と確認すると、それを見た彼女は鉛筆を持って、紙に記した自分の名前の後に“より”と付け加えた。一連のやりとりの中で「相手に発信する」ことを意識し、彼女なりに考えて付け加えた2文字だった。

ずっと友だちの様子を見る中で、恥ずかしさを乗り越え「やってみようかな？」という気持ちに至ったことは、とてもうれしい変化だった。

### (3) 2人の変容のポイント

A男とB子に見られた変容は、なぜ見られたのか。あらためてそのポイントをまとめてみる。

#### ○受け入れてもらえたうれしさ

A男にとってのやりとりの対象は、初めはI先生だけだった。1対1のやりとりの中でI先生から返事が返ってきたこと自体がとてもうれしいことだった。ましてその文面からは、自分に合わせて「～ちゃん」とつけて自分を呼んでくれたことや、自分の意見に対して同意をしてくれていたことが感じられた。このうれしさが、さらなる意欲を引き起こしたと言える。

#### ○相手がいることの実感

A男にとって、修学旅行でI先生がいる滋賀県を訪れたことは、そこと自分の住む石川県との距離間などを感じることができた出来事だった。本来であれば、そこで実際にI先生に会えるとさらに実感が増すが、そこまで出来なくても彼には十分実感できたと考えている。この「相手が実際にいる」という感覚が、さらにやりとりへの意欲となった。

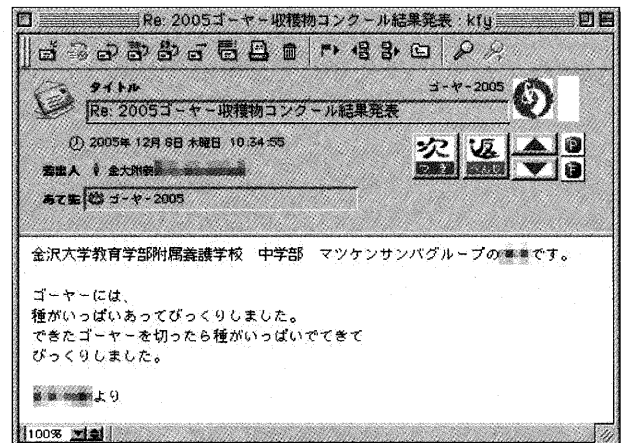
#### ○友だちの様子から学ぶこと

B子にとっては、チャレンジキッズへの関わりはとても敷居の高いことであった。しかし、A男や他の友だちが、発信を繰り返していく過程を見て、楽しそうに取り組んでいる様子に接し、それに影響を受けて、少しずつではあるものの「取り組んでみようかな」という気持ちになっていったことは、回を追うごとの彼女の様子を見て分かった。

#### ○必然性のある状況の中で

栽培経過の報告などの取り組みは、まず自分の側から発信し、それに対して返信があり、やりとりが生まれるという流れであった。しかし「コンテストで賞を受賞し、そのお礼を書く」ということは、相手からの発信にこちらが返信するという状況である。その因果関係や必然性は、生徒たちにとって分かりやすいものであり、これまでよりスムーズに文章を考えることができていた。

その分かりやすい状況と、その中で取り組む友だちの雰囲気はB子にも伝わり、彼女にとっての「初めての発信」という恥ずかしさの大きな要因は拭いきれなかったものの、それでも何か発信してみようという気持ちにつながったのではないかと考えている。



B子の初めての発信

## 5. まとめと今後の課題

このように今回の取り組みを通して、生徒たちにいくつかの変容が見られた。ほとんどの生徒にとって、はじめはとても敷居が高いと感じていたであろう、会ったことのない人へのメッセージというものが、今回の取り組みを通して、案外身近に感じられたのではないかと感じている。これも「できた」ということへの達成感が為せるものであろう。

またその中で、全体のやりとりからするとわずかではあったが、他の学校の生徒ともやりとりできたこと、あるいは、直接やりとりできないまでも他の学校の生徒がどんなことを感じて報告しているかを（その書き込みを見て）知ることは、学びの相互作用を生み、本校の生徒たちにとっても実に有効に作用したと言える。この点に関しては素直に喜びを感じている。そして、このような学びの相互作用を得られたことは、電子メールを用いた1対1のやりとりではなく、参加するすべての人が見ることのできる電子掲示板のスタイルだからこそ生まれた成果だと言える。

しかし、まだ充分ではない点、今後さらに取り組みたい点なども残されている。以下に今後の課題として整理する。

### （1）生徒の変容をどうとらえるか

一緒に接している教師の実感として、いま述べたような変容が生徒に見られたのは事実である。しかしこれをしっかりと分析して、発言と変容の因果関係などを含めてとらえる必要がある。

そこで、太田\*<sub>1</sub>が採用した、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた発話の質的分析の手法を用い、これまでの発話（この場合はチャレンジキッズへの書き込み）の流れを追ってしっかりと分析することに、今後取り組んでいきたい。

### （2）さらなる意欲への期待

また、今回のゴーヤー栽培コンテストの取り組みを通して利用してきたチャレンジキッズという環境に、それ以外の話題で関わろうとする生徒が見られなかったのもいささか残念な点である。「こんなことも伝えたい」というような気持ちが起き、それを実行に移すようになってくること、つまり自ら発信したいという意欲をもってくれることを期待している。そのためには、今後さらに意欲や興味を喚起するような働きかけ、あるいは自然に関われるようなきっかけづくりなどをしていきたいと考えている。

---

#### 【参考文献】

- \* 1 太田容次（2003）「特別支援教育における情報活用能力育成を目指したカリキュラム開発と評価」滋賀大学大学院教育学研究科修士論文
- \* 2 「特別支援教育におけるコミュニケーション支援」編集委員会（2005）「『特別支援教育におけるコミュニケーション支援』AACから情報教育まで」ジアース教育新社